大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

ホーフマンスタールーチャンドス卿の『手紙』について（その一）

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2011-12-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 船越, 克己 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00006432

ホーフマンスタール——チャンドス卿の『手紙』について（その一）

船越克己

一

『手紙』を扱うこの小論をおこすにあたり、月並ながらホーフマンスタールとアンドリアンの往復書簡から該当部分を引くことにしたい。一九〇二年九月九日付でホーフマンスタールはタイプした『手紙』の写しを友人アンドリアンに送り、次の説明を加えている。

私のこの作品を君に送るのは、申訳程度の意味をそれに添えるためではありません。実は二つの別の理由があるのです。一つには、それは小品ながらまさしく完成したものだからです。[……] 二つには、詩作品ではないにしろ、この作品には個人的なことが強く粘着している[……]からです。(1)

ホーフマンスタールはついで『手紙』は「自分の心の中を語る」のに恰好の「様式」であったと書くが、『手紙』を読んだアンドリアンは納得しない。「自己告白」ならば「ありのままの話」が最適であり、イギリスの過去に舞台を移すごとき「史的虚飾」はいただけないとつむじを曲げた。(2) それに対しホーフマンスタールは次のように釈明している。

つまり君が言うのは、私はこうした告白とか省察のために歴史の仮面を用いるべきではなく、それらを直接のべるべきだということですね。[……] この内容を直接に言えと重ねておっしゃるならば、私にはこの作品に対する食指はいくばくも動かぬはずです。私にとってたまらぬ魅力とは、過去のもろもろの時代を死の世界に閉じ込めてしまわぬこと、あるいは遠くの未知なるものを近くの類縁として感知させることです。(3)

同じ個所でホーフマンスタールは、八月にベーコンの随筆をめくり、「そこの口調になぞらえて何か文章を書く気」（強調はBIIによる）になったこと、かつその中味は「自己の内なる体験、生ける体験から借用」したと打明けている。『手紙』の草稿が書かれたのが一九〇二年の八月頃であり、それがベルリンの日刊紙「デァ・ターク」に掲載されたのが同年一〇月一八、一九日であるから、彼らの所感はチャンドス卿の『手紙』に対する最も早い評に数えられる。ここでホーフマンスタールは、『手紙』において自己の「体験」を一つの「完成した」作品に仕上げることができたと、多少の自負をこめて友に報告したのである。

二

自己の内部に今なお「生ける体験」として生残るもの、それはすでにその時どきの詩人の感性と意識の濾過器を通過したはずである。それはチャンドスの言葉を借りて「生と死の、夢と目覚めの流動体（Fluidum）」(4)と形容することもできる。「流動体」という語はベーコンの著作集の中で、初期キリスト教の一教父が「詩（ポエジー）」を「悪魔の酒」（*vinum daemonum*）と呼んだことを記述する個所(5)をば想起させる。「もの言わぬ事物」(6)が語りかける「夢と目覚めの流動体」を「ある言語」で書くことの困難の自覚のうちに、チャンドスの「文学的な活動」(7)の危機

があったのだ。

チャンドスが『手紙』に綴ったものの素材はホーフマンスタール自身の「個人的な」経験の蓄積のうちに見出される。ここに『手紙』をめぐる「体験」と「作品」の落差の問題が生じる。まぎれもなく『手紙』は書簡形式を用いた「作品」なのである。もしホーフマンスタール文学のもつ現代文学での位相を求めようとすれば、この落差の考察をいささかも軽視することはできない。ムージル、H・ブロッホ、カフカの小説を思いおこせばよいが、彼らはこの落差の上に散文作品を構築したのである。ホーフマンスタールは『手紙』をもって、『アド・メ・イプスム』に言う「獲得された社会性」(Das *erreichte Soziale*)への意識的な一歩を踏み出したとみなすことができる。「それはしばしば私を悩まし、不安にさせた問題です。(『痴人と死』の中ですでに、あるいはあなたも御存知かもしれぬチャンドス卿の『手紙』において最も強烈に)——どうして孤独な個人が言語を通じて社会と結びつくようになるのか、いや言語を通じて、欲しようが欲しまいが、救われぬままに社会と結びついているのだろうか。——そしてさらに、どうして語る人がなお行動することができるのか。——語ることはすでに認識であり、従って行動の止揚であるはずなのに。——これが語ることと行為することの、認識と生の永遠の二律背反に関する私の個人的な、念頭から去らぬ観点ですが[8]「……」。」後にホーフマンスタールはヴィルトガンス宛にこのように書いている。

『手紙』が「体験」と「作品」のずれを内にもつことは先のアンドリアン宛の書簡が証言するが、『手紙』に「強く粘着」する「個人的なこと」とは何を指すのであろうか。この問いに対してはホーフマンスタールの書簡が一つの解答を与えてくれるが、それについては改めて第三章で取上げることにしたい。

ホーフマンスタールの個人的「体験」が『手紙』において「作品」として成立したとすれば、彼の「体験」が「作品」とならず、そのまま私的書簡のうちに綴られたものがある。この意味でチャンドス卿の『手紙』に比較できる一通が若きホーフマンスタールの友人宛の書簡の中に見出されるのは興味のあることだ。その書簡の相手はベーベンブルクである。もとよりこの多感な海軍士官には、『手紙』の受取人たるベーコンにしばしば擬せられるゲオルゲのように、弟子に対する師のいかめしい容貌は寸毫もない。それはともかく、今われわれが引くのは一八九五年六月十八日付のホーフマンスタールの一通[9](以下「六・一八書簡」と記す。)である。ホーフマンスタールが竜騎兵連隊に勤務していたゲーディング時代にしたためられたこの書簡は、フィッシャー書店から出された二人の『往復書簡集』で四頁余りの分量であり、内容、体裁ともチャンドスの『手紙』に匹敵すべくもない。しかし、前後して書かれた、『手紙』の字句を連想させるベーベンブルク宛の数通のうち、やはり「六・一八書簡」は「完成した作品」たる『手紙』の有力なスケッチの一枚なのだ。

この友への手紙は風景描写に始まる。「淡い緑の畑」には「裸足で赤いスカーフをつけたスロヴァキアの農家の娘たち」が目に映る。実はこの光景の語りは六月五日付のベーベンブルクの書簡に対する返し言葉であるが、何よりも色彩を表わす単語が特徴的である。続いて「ところで」(und)という接続詞が二度用いられ、それによって色彩の対比を導く場面が並列的に提示されることになる。

> ところでわれわれは淡い青や緑に塗られた家屋のある小さな村をあちこちと馬に乗って通過する。ところで遠い、色のさえぬ(farblos)空を背景に、巨大で悲しげな姿を浮かび上がらせるポプラの大樹の並木がのびる。人影のない長い並木道だ。

「娘たち」——「家屋」——「ポプラ」は互いに並列の接続詞„und"によって結びつけられ、次の文章の「それらすべてのうちに」数えられるのである。「それらすべてのうちに私は時おり、かくも名状し難

い、息もつまる孤独の感情を抱くのです。あたかもそれらはすべて金輪際生には、現実の生には属することなく、私の理解も及ばぬ、私の不安をかき立てる世界に、どうしたことか私が迷い込んだとしか言いようのない奇妙な世界（Reich）に属しているかのようです。」この感情は「生の一片をいつもつかみながら、その度それを奪い返される」感情である。この感情については「いつか」（einmal）多少語ることもできようとホーフマンスタールは記している。この「いつか」という副詞は「いつか墓の中で」というチャンドスの『手紙』の終りの„einst“に重なっていくほど意味深長である。加えて、ホーフマンスタールは『手紙』を先取するごとく、「六・一八書簡」の結びに次の表現を与えている。「私はこれらすべてをできればいつか書き記したいものです。第一それは私の信ずるところであり、第二にそれが君にもしや何かを語るかもしれぬからです。」

チャンドスの『手紙』は「文学的な活動の完全な断念」の事情をベーコンに伝える意図で書かれた。「文学的な活動」の困難について、アンドリアンの言う「ありのままの話」をしているのが、まさしく「六・一八書簡」にほかならない。オーストリアの詩人にとって「文学的な活動」はどうあるべきかの意識さえも――それは後のホーフマンスタールにおいて批評と創作の生ける結合のうちに看取される問題であるが――すでにこの書簡に提起されている。

キール発、六月十二日付のベーベンブルクの書簡は「国民（Volk）の中の不穏な動き」、「自由への運動」、「社会民主主義者」等に対する差出人の好奇心を吐露している。これに言及した十八日のホーフマンスタールの書簡は否定的態度を表明した。通常「社会的問題」と呼ばれるものは「皮相的なもの」にすぎぬとホーフマンスタールは諫める。それらは「現実に」（wirklich）存在するとは思われないからだ。ものの本質は「現実に」どこに隠れているのか、ものの内部にか、それとも「外層」にか、それを知る者はいない。こうした懐疑はニーチェの著作の影が濃い[10]と指摘される次の一句に要約されよう。即ち『友の書』に言う、「深みは隠さねばならぬ。どこに？　表面に[11]」と。このような逆説的なものの見方に到達したのも「奇妙な、容易に理解を許さぬオーストリア」の特殊性のなせる業であると、「六・一八書簡」でホーフマンスタールは自覚している。

「国民」（Volk）を私は知りません。国民ではなくて、少くともわが国では民衆（Leute）しか存在しないと私は思います。それも非常に雑多な民衆です。貧しい層のうちにも非常に雑多な民衆が、しかも多様極まる世界を内にもちながら、存在しているわけです。それからわが国では国籍とそれに伴う発達度における途方もない多様性があることを君は忘れてはならない。赤貧のユダヤ人学生、堕落したウィーンの伊達男、メランコリックなボヘミアの竜騎兵、零落したドイツ・モラヴィアの職人、それから…それから…それから…彼らは五万人にも達し、『プロレタリアート』と呼ばれています。

しかし、これらの多様な集団はホーフマンスタールにとっては一つの救いであった。「個々の者から何か私は手をつけられる。もしや個々の者を助けることができるかもしれない。個々の者を理解することもできる。これこそ重要だと思うのです。」この発想こそオーストリアの特殊性だとホーフマンスタールは考える。「西欧」では「大衆」（die Massen）は「ずっと均等化されている」であろうが、オーストリアの現状も別に悲しむべきものではない。これに関連する事柄であるが、一八九七年に発表された『フランス語成句集』の中でホーフマンスタールが、フランス語はあらゆる階層が用いた言い回しの混ざった「より世俗的な[12]」言語であると羨望をこめて語ったとき、彼はオーストリアの文学的使命を何らか意識していたことも事実である。「大衆」の「均等化」された「西欧」とは異るオーストリアの文学的使命がその後ホーフマンスタールにおいてどのように展開していったか、

今ここで詳述することは避けたい。しかし「『国民』(Volk) という高い概念」[13]を熱っぽく語りかける一九一五年のホーフマンスタールから、さらに一九二七年のミュンヘン講演『国民の精神的空間としての著作』の訴える文学理念から、われわれは彼の文学的使命のイデーを、就中その一貫性を把握できるはずである。一八九五年の「六・一八書簡」で注目されるのは、以後晩年のホーフマンスタールに到るまでの一貫した文学理念の萌芽がすでにそこに語られていること、これである。

「概念」に余り強く首を突込まないようにとホーフマンスタールはベーベンブルクに警告している。これは六月十二日付の書簡に書かれた「国民」の概念、さらには「労働者」(die Arbeiter)、「自由への運動」などに触れているとみてよい。ホーフマンスタールにとってこれらの概念は「空虚」であり、オーストリアの風土にはそれほど「合わぬ」ものであった。彼は自己の「経験と回想」に照らし次のように言った。「重要なことは新しいものを見聞することではなく、自らに目覚め、そして所有しているもので何かを始めるすべを学ぶことです。」「所有」とはオーストラリアの所有と解してよい。「新しいもの」とは「西欧」でしか「意味」をもたぬ「概念」であり、それはこの国にとっては混乱した「抽象的な概念」でしかなかった。

非常に数多くの抽象的な概念、互いに絡み合い、互いに浸透し合った抽象的な概念は大河が両岸に打上げた石ころみたいなものです。流れる川の真中を泳ぐ者にとってそれらは何のかかわりもなく、それらにかまう必要もないはずです。ただ、犬どもが古い骨を引きずり回わすように、絶えず概念を引きずり回わしてはばからぬ非常に多くの人たちを見れば、困惑させられるのも当然です。だからこの雑踏全体を無視する気にはなかなかなれぬものです。しかしそれを敢えてやらねばなりません。

ここに表明された「無視する」(für nichts zu achten) という語は文学に寄せるホーフマンスタールの強い精神的態度と表裏一体をなしている。「西欧」の「新しい」概念を「無視する」こと、その過程の中にあの「奇妙な、容易に理解を許さぬオーストリア」の文化に対する認識の原点をホーフマンスタールは探ろうとしたのである。『フランス語成句集』でフランスの「世俗的な」言葉から彼が聞いたものは、やはり「過去の、世俗的な事物」であったことを思えば、後のホーフマンスタールの意識を支配した文学理念は少くとも、「西欧」の「新しい」概念とは相容れぬ要素をその萌芽にもっていたとみなければならない。„für nichts zu achten“ という言葉の内にこめられる強い意志は悲劇『塔』(一九二五) のイグナチウスの台詞――「空なり、無なり (Nichts ist! nichts ist!)、仮借なき最後の審判、麦より殻をより別けるかの裁きのほかは、すべて無なり。」[14](岩淵達治訳) ――に現われることからしても、「六・一八書簡」における「無視する」の意味の大きさを看過することはできない。

「抽象的な概念」を退けたホーフマンスタールはその後、素材の多岐性の中に、あるいは「獲得された社会性」を通り、『塔』の最終稿に到る道程における文学と社会とのかかわりの中に、自己の「文学的な活動」を実践していくことになる。その際、詩人の表現にとって唯一の道具ともいえる言葉がどれほど確なものであるかという問題は、すでに最初の試練をはるか後にしていたのである。言葉の問題に対するこの試練はチャンドス卿の『手紙』において一つの克服をみたと、私は考えるものだが、その問題はまさに『手紙』の下絵たる「六・一八書簡」の核心でもあった。

「たいていの人間は生の中に生きるのではなく、仮象の中に、一種の代数学の中に生きているのです。そこには何ひとつして存在するものはなく、すべてがただ意味をもつにすぎません。私はあらゆる事物の存在を強く感じたい。存在の中に身を沈め、深い現実の意味を感じたいと思います。なぜなら宇宙全体はまさしく意味に満ちており、形

となった感覚（Sinn）であるからです。」ホーフマンスタールはベーベンブルクにこのように書いている。彼の関心は「深い現実の意味」を「強く感じ」ること（強調は筆者による）であった。彼にとって万物が「ただ意味をもつ」ことを悟るだけでは、「生」を生きることにはならない。「深い」、「強く」というのは言い表わし難い事物の存在を敢えて表現するための鍵の言葉である。「人は存在するものすべてを口にする（sagen）ことはできる。〔……〕しかし何かあるものを在るがままの状態で語り尽すことはできないのです。（Aber man kann nie etwas ganz so sagen wie es ist.）」しかし詩人は事物を「在るがままの状態で」語るすべを心得ねばならない。そこに「表現」されうるものは「言葉でもって描出できないもの」、しかし「われわれの心（Seele）に語る」ものである。「生」が「もろもろの現象の中で」語りかけてくるとすれば、事物の「現象」を、あるいは「状態」（wie）を描出しようと努めることは、単に修辞法の問題ではないのだ。「生の無数の事物」の中に存在し、「われわれの心に語る」ものを書きとめること、事物の「状態」を「在るがまま」に「語り尽す」こと、それは「言葉」（Worte）と「心」（Seele）とを「独立したひとつの世界」（eine Welt für sich）の次元でとらえようとする試みである。実はその試みをホーフマンスタールは「六・一八書簡」の中で実践しているのである。

山の高み（Hochsein）、海洋の大きさ（Groß-sein）と夜の暗さ（Dunkel-sein）、馬の顔づら、われわれの手のつくり、ナデシコの香り、土地が起伏し窪地となり、あるいは砂丘となり、あるいは険しいがけとなるさま、平地が山から見えるさま、また暑い日中ぬれた板石を敷いた涼しい玄関に入ったり、氷菓を食べたりするときの感じ、これらすべての生の無数の事物の中には、それぞれの中に比類なく、何かが表現されているのです。

悲しみとは現実の言語の中の一つの概念です。生の言語の中には多数の悲しみがあります。石と海と空しか見えぬときの悲しみ、新鮮なイチゴの香を嗅ぐときなどの子供の頃を思い出さずにはおれぬ悲しみ、時おり猿どもが見せる疲労した目の悲しみ、太陽がいつも通り沈んでいくときの全く別種の悲しみ、その他にもたくさんあるのではないでしょうか。これらの言葉はこの世界のものではありません。それらは独立したひとつの世界なのです。

これら二つの文のうち、前者は存在物の様態を、後者は一つの「概念」の現実世界における諸相をのべるが、いずれも「言葉」によって「生」を「現象」の中から受信する試みである。「生はもろもろの現象の中で語る」のであるから、「生」をとらえるためには「言葉」は何よりも事物の在り様を叙述することを第一義とせねばならない。それ故重要なのは「一つの現象、言葉の一つの結合、音調の一つの絡み合い」なのである。それらは常に「同一のものとしてわれわれの心に触れる。」つまり「言葉」が描くものは、『詩についての対話』（一九〇三）の中の標語それ自体を借りれば「心の風景」[15]（Die Landschaften der Seele）といってよい。「言葉」によってとらえられ、「われわれの心」に伝達されるもの、それを名づけてホーフマンスタールは「絶対に同一のもの。未知なるものの、あるいは神の顫動の三重の表現」であると、「六・一八書簡」では言う。

この「書簡」は詩人についても言及している。「生」を「正確な言葉」で「再現する」（wiedererzählen）ことはそもそも不可能である。しかし「詩人」は「存在全体の内に散在する一つの媒体を用いて自己の心を表現する（ausdrücken）」ことができる。詩人の「表現」行為とは何か。なるほど「存在」（das Dasein）は「ありとあらゆる音調の総体」を「自己の内に」もつ。しかし重要なのは、詩人が「存在」の中から彼の「心」に触れるさまざまな要素をつかみ出し、それらを「結合する」こと、つまり諸要素の「連結」を通じて「彼の心の全体」を「表現する」ことである。詩人が表現するものは「世界の動き

(Spiel) の全体」なのである。ここにのべられた詩人論は『詩と生活』(一八九六) にちょうど次のようにまとめられている。「詩の素材は言葉であるということ、一篇の詩は言葉で作られた重さのない織物であり、言葉は目に見えるものの記憶と耳に聞えるものの記憶を運動の要素と結合しながら、自らの配置、響き、内容によって、われわれが情緒と呼んでいる、一つの精確に書き換えられた、夢のように明白ではかない心の状態を呼び出す」[16]のである。もし初期ホーフマンスタールの詩人論の見出し語として、「言葉の一つの結合」、「心」(以上、「六・一八書簡」) あるいは「詩の素材」としての「言葉」、「情緒」(以上、『詩と生活』) を掲げたとしても的をはずしたことにはなるまい。極言すれば当時ホーフマンスタールはいかに「生」を「言葉」で表現できるかの問題を模索していたのである。そこにとどまる限り「六・一八書簡」はチャンドスの『手紙』の原形の域を出ない。

「六・一八書簡」は先にのべた「結合」に基づく表現を目指す「詩人」を「一人の驚嘆すべき軽業師」にたとえている。

この男はボール投げにより、重量と運動の媒体を用いて(建築家にかなり似ていますが)、全く同じことを成就しているのではあるまいか。それによってわれわれの心中を強い憧憬、感動、止まぬ興奮で満たすのではあるまいか。だから私は思うのです、書かれただけで信じるに足る書物は何ひとつないと。けだしあらゆる偉大な書物、すぐれた詩集、聖書その他の書物もそうした夢の世界であり、それらは現実の世界に対し、また相互に対しても、ただ比喩的に類縁なのであり、ゴム管のように切離すことはできないのです。

チャンドス卿の『手紙』はこの「夢の世界」に訣別する挑戦である。「六・一八書簡」はこの時期のホーフマンスタールと彼の周囲の狭苦しい世界との拮抗のうちに書かれたものだ。そこでの体験はかろうじて「言葉」による救済を求めるにすぎない。『手紙』において一度、文学表現の可能性を徹底して確めてはじめて、ホーフマンスタールの作品は「社会性」の領域に踏み出すことができた。「六・一八書簡」の「軽業師」は『気むずかしい男』(一九二一) でハンス・カールの口から語られる「フルラーニ」に変わっていくのである。

「六・一八書簡」はチャンドスの告白する「陶酔」の状態をその結びにのべているのは特徴的である。

円熟することはもしかしたらただ次のことにすぎぬかもしれません。つまり自己の内部の声に耳をすますようになり、そのため巷のあらゆる騒音を忘れ、ついにはもはや何も聞くことはなくなる状態です。ナルシスの伝説のように自分自身に惚れ込み、水に映る姿に見とれ、水に落ちて溺死するならば、それは最良の落下ではないかと私は考えるのです。それはあたかも父のオーバーの袖の中を、ガラスの山やカエルの王様の泉の間をぬっておとぎの国へ落ちれば、と夢想する小さな子供と変わりないのです。「自分自身に惚れ込む」とはまさしく生に、また場合によれば神にも惚れ込むことだと私は思います。

「六・一八書簡」のテーゼはつまるところ、「詩人」は自己の「心の風景」を語ることによって、「生」を、「神」を語っているという詩人論にある。「書簡」の最後に引くナルシスのたとえにみられるごとく、ホーフマンスタールは仮象の世界の危険をまだそこに書き記していない。換言すれば「言葉はこの世界のものではありません。それらは独立したひとつの世界なのです。」という命題に宿る危険を彼は記さなかったのである。

「喜劇」という「獲得された社会性」を担うハンス・カールは語る。「ある事物を体験し、しかも見苦しい自分の姿をそこに見せないためには、自分自身の中に徹頭徹尾惚れ込むことが必要です。それはある程度の眩惑ですが、それを大人はことによると心の奥底の隅にもっていたとしても、とてもそれを告白できるものじゃありません。」[17] この心情こそ、ホーフマンスタールが「チャンドスの手紙」に認めようとした「沈黙の礼儀」(『アド・メ・イプスム』) とでも言えようが、それ

を彼はハンス・カールの口から「フルラーニ」を語らせることによって、言葉を用いて形象化している。「六・一八書簡」で「ナルシス」を描写したホーフマンスタールは、この喜劇において「フルラーニ」の本質を言葉をもって鋭くとらえた。「ハンスヴルスト」たるフルラーニは観客を笑いころげさせる。しかしこの男は「優雅」を失うことはない。「彼は自分自身と世界の存在すべてを尊敬しているのだと観客は気づくのです。」[18]「ナルシス」から「フルラーニ」への道は「何も聞くことはなくなる状態」から「自分自身と世界の存在すべて」の「尊敬」へ到る過程である。

われわれは「六・一八書簡」をチャンドス卿の『手紙』以前のホーフマンスタールの文学理念の一つの記録としてみてきた。「自分自身に惚れ込む」ことはこの書簡ではまさしく「生」あるいは「神」に没入することであり、詩人はその「心の風景」を「表現する」(ausdrücken)のみである。しかし、仮に「六・一八書簡」の「ナルシス」がいかに自由に言葉を操ったとしても、『手紙』をしたためることはできない。「六・一八書簡」は当時のホーフマンスタールの一つの「経験」にすぎなかったからである。

三

いわゆるチャンドス体験は若きホーフマンスタールの友人たちへの書簡に散在している。それらの体験が『手紙』に結晶しているのは、やはりそれがホーフマンスタールにとって素通りできぬ原体験であったからだ。そのことは例えば、一八九二年のベルガー宛の手紙（「ディレッタントと本物の芸術家の間に立つすべての探求する人間と同様、私にとっても」[19]）や一八九四年のベーベンブルク宛の手紙（「『教養の俗物』とはわれわれ一九世紀後半のドイツ人にとって全く気のきいた言葉です。」[20]）に書かれたニーチェ体験が一九二七年のミュンヘン講演に織り込まれているのに比べられる。われわれは『手紙』の中に仕上げられた章句の断片のうちに、ホーフマンスタールの友人宛の書簡にうかがえる幾つかの個所の痕跡を認めることができる。それを例示しておきたい。

（一）「啓示」(Offenbarung)

「これらすべては私の啓示の器となることができるのです。」（PII・一四）

知る価値のある唯一のものというべき、存在の意味は一つ一つ意味深く把握された生の現象の中から理解されます。それは一瞬の電光のような啓示のうちにす早くつかむことができ、心そのものの深い予感とおぼろげな憶測に関連づけられるのです。[21]［……］（ベーベンブルク宛、一八九四・九・二七）

（二）「とるに足りぬものの組合わせ」

「この如露、樹の影になって暗いその中の水、そしてその水面を端から端へ泳ぐ一匹のゲンゴロウ、このとるに足りぬものの組わせが無限なるものの現存をもって私を戦慄させる［……］。（PII・一六）

空や空気でさえもここでは醜いのです。ただ夕方などには時おりがまんできます。カブラ畑、ポプラ、れんが製造所、工場などですが、庭園はだめです。時おり私を喜ばす唯一のものは、狭苦しい路地にある小さなきたならしい家の小庭に植えられた大きな、みごとに輝く菖蒲です。[22]（ベーアーホフマン宛、一八九五・六・六）

何時間もちっぽけな庭の中に、しかもほこりっぽいもやのかかった夕暮どき、腰をかけているのは何か実に変な気持です。［……］二羽のきたないハトと脚をけがした二羽の怒った山ガラスの入った鳥小屋。［……］そろって汚れ、目は醜いが、すばらしい白い歯の犬ども。その中には生のあらゆる力が宿っていました[23]［……］。（アンドリアン宛、一八九五・八・七）

（三）「陶酔」

「私は当時一種の持続的な陶酔にひたっていましたので、存在全体が一つの大いなる統一に思われたのです。［……］すべての中に私は自然を感じていました。」（PII・一〇）

私は今奇妙な時を体験しています。私の内なる生はもろもろの人間、感覚、思想、書物から一つのもつれた統一を作っているのです。これらすべてのものの根は苔やきのこにみられるように、互いに絡み合って大きくなっていきます。すると突如、精神と感覚、精神と心、思考と行為の分離はうわべだけの気ままなものに感じられるのです。[24]（アンドリアン宛、一八九四）

それは一つの奇妙な、ませた放埒であり、概して言えば一つの冷ややかな陶酔です。〔……〕しかし思うに、それらのうちに、この半ば無意識的で、半ば熱病のような時代に、この無意味な卑下と子供じみた高揚の中に、このはにかんだ無口な感覚と破廉恥な思考の中に、嘘の中にさえも、すべての始まりはあったのです。われわれは当時感じることを覚えたのです。ちょうど今われわれが、われわれの感覚をば共に生きている存在と関連づけることを覚えねばならぬように。[25]（ベーベンブルク宛、一八九五・九・五）

（四）「精神的な硬直」と「危機」

「精神的な硬直〔……〕に対する不審を無造作にしゃれをまじえて言い表わす仕方は、人生の危機に見舞われつつも、落胆の色を見せぬ偉大な人間のみが行うことのできるものです。」（PII・七）

私の調子は悪いのです。内も外も荒涼としています。[26]（アンドリアン宛、一八九五・七）

それが何だか分かりませんが、私は実にみじめで、心地の悪いうたた寝のような生活を送っております。〔……〕あたかも私の本性に宿る多くの半ば真実なものを失い、悲しみの孤独の瞬間にそれをふり切り、自分をひたすら自分だけのものとせねばならぬ感じです。[27]（ベーアーホフマン宛、一八九五・七・二三）

あなたのお手紙は今日、悪性で深い不調に陥っている私の手もとに届きました。この状態の中で直感の一片の輝きのみならず、思考の明快さまでも苦痛にあえぎながら消えてゆくありさまです。〔……〕病的なものへ高められた、私の心情の不安と心配は私を囲むありとあらゆるものから〔……〕もっぱら陰うつさと重苦しさの素材のみを引出させようとするのです。[28]（ゲオルゲ宛、一九〇二・七・二四）

以上、われわれはチャンドス卿の『手紙』に綴られている幾つかの特徴的な章句が、すでに若きホーフマンスタールの書簡にその原初的体験として語られていることをみてきた。『手紙』の章句と友人宛の書簡の特定の個所とのこうした比較は随意的作業ではある。しかしそれによってある程度、『手紙』に対するホーフマンスタールのアンドリアンへの二つの釈明のうちの一つ――「この作品には個人的なことが強く粘着している」――が裏付けられよう。

先に引いた幾らかの書簡の断片をたとえ巧みに接着して、架空の一通の手紙をこしらえたとしてもチャンドスの『手紙』はでき上がらぬはずである。「六・一八書簡」においてホーフマンスタールは「抽象的な概念」の排除、「生」と「神」の聖域の伝達という詩人の使命を説いた。しかし詩人の内なる「ナルシス」はやがてその殻を破り、「社会性」を獲得せねばならなかった。同様に、友人宛ての書簡の中でいかに自己の精神の動きを語ったとしても、それはより高い「作品」への試作を続けているに等しい。われわれがすでに引用した書簡以外にも、ホーフマンスタールは『手紙』のために数多くのデッサンを残しているのである。

私は繊細なもの、微細なもの、繊維にほぐされたもの、印象主義的なもの、心理学的なものすべてにすっかり飽きてしまいました。生の純真な喜びがモミの実のようにそっけなく香を放ちつつ木から落ちてくるのを私は待っているのです。[29]（ヘルツフェルト宛、一八九三・七・十三）

未知の生をわがものにし、自己の現代を省察によって享受し尽し、消えてしまった現代を再び呼び出すことを通じて〔……〕現代を自分のものとするための大へんな努力〔……〕。[30]（父宛、一八九五）

私は全く別人になったと思います。以前私に何らかの意味をもっていた多くの言葉も全くどうでもよい意味のないものとなってしまいました。[31]（アルツクマンーカンタキュゼーヌ宛、一八九六・四・一三）

不幸であること、あるいは全然そうでないこと、それは芸術家にとっては全く同一のものなのです。[32]（父宛、一八九六・五・一三）

あらゆる『文学的な』関心は私には完全についてもよいぐらい疎遠になっています。[33]〔シュムニロフークラーセン宛、一八九七・四・一〕

ホーフマンスタールがこのように自己の文学的使命、あるいはそれをめぐる苦悩をいかに綴ろうとも、それは私信という形式の限界をもたざるを得なかった。しかし、チャンドス卿の『手紙』という芸術上の形式の枠をホーフマンスタールが用いたとき、彼は自己の文学に対し新たな展望を見出したのである。

原典

Hugo von Hofmannsthal : Gesammelte Werke in Einzelausgaben, herausgegeben von Herbert Steiner. Frankfurt a. M. (S. Fischer Verlag)

PI ……Prosa I (6.—10. Tsd.), 1956.
PII ……Prosa II (6.—9. Tsd.), 1959.
PIII……Prosa III (6.—7. Tsd.), 1964.
PIV……Prosa IV (1.—5. Tsd.), 1958.
LII ……Lustspiele II (8.—9. Tsd.), 1965.
A ……Aufzeichnungen, 1959.

Briefe

BI……Briefe 1890—1901. Berlin (S. Fischer Verlag) 1935.
BII……Briefe 1900—1909. Wien (Bermann-Fischer Verlag) 1937.
H.v.H.—L. v. Andrian……Hugo von Hofmannsthal, Leopold von Andrian. Briefwechsel. Hrsg. von Walter H. Perl. Frankfurt a. M. (S. Fischer Verlag) 1968.
H.v.H.—v. Bebenburg……Hugo von Hofmannsthal, Edgar Karg von Bebenburg. Briefwechsel. Hrsg. von Mary E. Gilbert. Frankfurt a. M. (S. Fischer Verlag) 1966.
H.v.H.—R. Beer-Hofmann……Hugo von Hofmannsthal, Richard Beer-Hofmann. Briefwechsel. Hrsg. von Eugene Weber. Frankfurt a. M. (S. Fischer Verlag) 1972.
H.v.H.—St. George……Briefwechsel zwischen George und Hofmannsthal. Zweite ergänzte Auflage. München und Düsseldorf (Helmut Küpper vormals Georg Bondi) 1953.
H.v.H.—A. Wildgans……Hugo von Hofmannsthal, Anton Wildgans. Briefwechsel. Hrsg. von Norbert Altenhofer. Heidelberg (Lothar Stiehm Verlag) 1971.

註

(1) H.v.H.—L.v Andrian. S. 157.
(2) Ebd., S. 158.
(3) Ebd., S. 160 f.
(4) PII, S. 15.
(5) Selected Writings of Francis Bacon. New York (The Modern Library) 1955, p. 8, p. 340.
(6) PII, S. 20.
(7) PII, S. 7.
(8) H.v.H.—A. Wildgans. S. 31.
(9) H.v.H.—v. Bebenburg. S. 79—83.
(10) Vgl. H. Jürgen Meyer-Wendt: Der frühe Hofmannsthal und die Gedankenwelt Nietzsches. Heidelberg (Quelle & Meyer) 1973, S. 136 ff.
(11) A, S. 47.
(12) PI, S. 305.
(13) PIII, S. 505.
(14) PIV, S. 69.
(15) PII, S. 96.

(16) PI, S. 263.
(17) LII, S. 312.
(18) LII, S. 220.
(19) BI, S. 68.
(20) H.v.H.—v. Bebenburg. S. 54.
(21) Ebd., S. 58.
(22) H.v.H.—R. Beer-Hofmann. S. 52.
(23) H.v.H.—L. v. Andrian. S. 54.
(24) Ebd., S. 21.
(25) H.v.H.—v. Bebenburg. S. 98 f.
(26) H.v.H.—L. v. Andrian. S. 51.
(27) H.v.H.— R. Beer-Hofmann. S. 57.
(28) H.v.H.—St. George. S. 162 f.
(29) BI, S. 84 f.
(30) Ebd., S. 148.
(31) Ebd., S. 181.
(32) Ebd., S. 192.
(33) Ebd., S. 210.